

2012.9.15

生誕100年の 名指揮者たち その2 ライトナーとラインスドルフ

プログラム

名指揮者の当たり年と言われる1912年。今年生誕100年を迎える名指揮者たちの演奏をお聴き頂くシリーズの2回目は、ライトナーとラインスドルフです。

フェルディナント・ライトナー(1912~1996)はドイツのベルリン生まれ。我が国ではNHK交響楽団への客演でおなじみでしたが、シュトゥットガルト国立歌劇場、チューリッヒ歌劇場、ハーグ・フィル等の音楽監督を歴任、派手さはないものの、実力派の名指揮者として知られていました。ライトナーの演奏は個性に乏しいと言われた時代もありましたが、歳を重ねて行くうちに、ドイツの伝統を受け継ぐオーソドックスなスタイルから、いぶし銀の味わい深い音楽を奏でるようになりました。

エーリッヒ・ラインスドルフ(1912~1993)はオーストリアのウィーン生まれ。1962年から1969年まで音楽監督を勤めたボストン交響楽団との数多くの録音で有名になりましたが、その評価はあまり芳しいものではありませんでした。ラインスドルフの実力が認められるようになったのは、ヨーロッパに戻ってからで、ウィーン交響楽団、ベルリン放送交響楽団の音楽監督、ベルリン・フィルやバイエルン放送交響等ヨーロッパの名門オーケストラを次々指揮して、その実力ぶりを発揮して行きました。ラインスドルフの指揮は天性のリズム感の良さ、テンポ感の良さが、時に“壺にはまった”演奏を生み出し、晩年にはスケールの大きい巨匠的な風格も加わって、更に魅力を拡げて行きました。

今日はライトナーが得意としたブルックナーとリヒャルト・シュトラウス、共にウィーン出身のグルダとラインスドルフのモーツァルト、そしてラインスドルフの“壺にはまった”演奏の一例としてヨハン・シュトラウスとラヴェルの作品をお聴き頂きたいと思います。

アントン・ブルックナー(1824~1896):

交響曲第9番ニ短調 ~ 第1楽章、第3楽章から

フェルディナント・ライトナー指揮シュトゥットガルト放送交響楽団
(1983.11.14 シュトゥットガルト、ベートーヴェンサールでのLive)

リヒャルト・シュトラウス(1864~1949):

交響詩“ティル・オイレンシュピーゲルの愉快な悪戯” op.28

フェルディナント・ライトナー指揮NHK交響楽団
(1986.5.9 NHKホールでのLive)

*** 休憩 ***

ヴォルフガング・アマテウス・モーツァルト(1756~1791):

ピアノ協奏曲第20番ニ短調K.466 ~ 第1楽章、第2楽章から、第3楽章

フリードリッヒ・グルダ(ピアノ)
エーリッヒ・ラインスドルフ指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
(1981.5.24 ウィーン・コンツェルトハウス大ホールでのLive)

ヨハン・シュトラウス(1825~1899):

喜歌劇“ジフシー男爵”序曲

エーリッヒ・ラインスドルフ指揮ウィーン交響楽団
(1975.6.8 ウィーン・コンツェルトハウス大ホールでのLive)

モーリス・ラヴェル(1875~1937):

バレエ音楽“ラ・ヴァルス”

エーリッヒ・ラインスドルフ指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
(1989.10.10 ベルリン、フィルハーモニーホールでのLive)